

「あの中へ一ツや」
 「それは少しカイナイやろ」
 「そんな事放つとき」
 「何が這入つたあるやろ」
 「そんな事は解らん」
 「お前の想像では」
 「そうやな、マア玉子の巻焼か」
 「玉子のマクワクか」
 「お前、あんじよう物が云へんか、玉子の巻焼や」
 「マクワクか、オーイ早う蓋を取り」
 「そんな事は放つときんかゐな」
 「ア、蓋を取りよつた、甚い煙や」
 「あれは湯氣や」
 「黄色い物が這入つてゐるな」
 「あれが玉子の巻焼や」
 「赤いのんは」

「はじかみ生姜や」
 「ア、よそいよつた……オーイあんじようよそわんと足ん様になるぞ」
 「そんな事を云ひな」
 「客の處へ持つて行きよつた、箸を持ちよつた、生姜を喰ふてよる……オーイあんまり生姜を喰ふたら頭が禿るで」
 「お前が心配したら禿るで」
 「玉子を早う喰ひ、玉子は冷うなつたら喰はれへんで……嫌ひか、嫌ひなら私におくれ」
 「コレ、手を出さないな」
 「又持つて來た、あれは何んや」
 「あれは鰻や」
 「あれ鰻か、私の喰ふてゐる鰻と形が違ふな」
 「お前鰻を喰ふてゐるか」
 「常時喰ふてゐる、私の喰ふてゐる鰻は短ふて細いが、あの

鰻は巾が廣うて長いで」
 「鰻は皆長いもんや、お前の喰ふてゐるのははんすけと違ふか」
 「いゝや源助に買ふねん」
 「いゝやいな、はんすけとは鰻の頭と違ふかと云ふねん」
 「エ、鰻は胴のある物か」
 「そうやが、鰻は胴を喰ふもんや、頭は皆放かすねん」
 「ア、そうか、頭は放かすのか、放かす處でもあないに美味のに定めし胴體は美味かろう、どうぞ私も死ぬまでに鰻の胴體に巡り逢ひたい事や」
 「コレ、そんな心細い事を云ひないな」
 「一寸見てみ、あの藝州鰻を川の中へ放りよる、勿體ない、今更川へはめても焼いた鰻が生きかへるかいな、今天狗風が吹かんかいな」
 「何んでやねん」
 「あの鰻が舞ひ昂るやろ」

「そんな物が舞ひ昂るかゐな」
 「一寸見い、巻すしを持つて來たで……舞妓の前へ置きよつた、舞妓が喰ひよる、あれを長いなり喰ひよる……オーイそんな長いすしを喰らんと切つて貰ひ」
 「あれが尺八喰ひと云ふねん」
 「そんな事を仕ても喰み切られへん、淺草のりの上等や……喰ひ切られへんと云ふのに、前にのりをぬらして嚙るねん、エ、どんな奴やなア、オイ是れを見てみ、こう云ふ具合に（プウ）甚い砂やな此のすしは」
 「お前、雪駄を嚙んでどうするねん」
 橋の上で喧しゆう云ふて居ります處へ、上手の方から下つて參りましたのが稽古屋の連中、碇の揃への浴衣で三味線太鼓で囃子立てゝ其の陽氣な事（囃子入り）唄「ふけよ川風、上がれよ簾れ、中のお客の顔見たや」
 「オイ清イやん、一寸見てみ綺麗な事わいな、見れば綺麗な碇の模様」